

季刊

博物館だより

FUKUSHIMA MUSEUM
QUARTERLY

URL <http://www.general-museum.fks.ed.jp>

76

春の企画展 **古い**
古いをめぐる美とカタチ

福島県立博物館



斎藤隆 作「貌」(作家蔵)

急速な高齢化を迎える日本。残念ながら明るいニュースばかりではありません。確かに「老い」は肉体の衰えという避けがたいマイナス面を抱えています。しかし、「老い」は人間の精神活動に深さを与える原動力でもあります。「老い」を避けて文化・社会の成熟はありえません。日本では「老い」はどのように捉えられてきたのでしょうか。近世を中心に中世から近現代までの「老い」をテーマとした美術工芸品、現代の作家の作り出すアートを通して「老い」について考えてみたいと思います。また、関連事業も盛りだくさんです。展示のご観覧とあわせてどうぞご参加ください。

展示は以下の6コーナーで構成されます。

「老い」の力

積み重ねた経験・知識、悠々自適の心境。「老い」る事でしか到達できない創造の世界を探ります。雪村・浦上玉堂・葛飾北斎・谷文晁・亜欧堂田善ら長寿の画家の晩年作、富岡鉄斎・松田権六・板谷波山・富本憲吉ら長寿の近現代芸術家の到達点を示す名品を紹介します。

「老い」の姿

歴史を刻んだ表情は時に悲愴であり、魁偉でもあります。しかし、古来多くの表現者はその魅力に引かれ、「老い」の姿の表現に取り組んできました。肖像画・肖像写真・マンガに見る「老い」の表現、故事人物図などに見る「老い」のイメージ、現代のアーティストの捉えた「老い」の姿を紹介します。

「老い」を迎える

「老い」は「死」に近づく過程です。であればこそ、人々は来るべき「死」を迎える準備を怠りませんでした。来迎図・熊野観心十界曼荼羅、経塚遺物などに、来世への願いを見つめます。

「老い」を祝う

「長寿」は人々の最も切実な願いの一つです。「長寿」を心から祝う社会こそが成熟した社会と言えるのではないのでしょうか。長寿を願い、祝い、記念するためのさまざまなモノが作りだされています。寿老人図・高砂図などを紹介します。

「老い」を生きたる

「老い」はプラス面だけでは語れません。肉体的な衰えによるさまざまなトラブルが生じます。時に、それは滑稽で悲哀に満ちていますが、包み隠さず「生きる」ことはマイナスをプラスに転じる行為でもあるのです。禅画、錦絵新聞に見るシビアでもありユーモラスでもある老人の姿を紹介します。

春の企画展 **老い** 老いをめぐる美とカタチ

●会期 平成17年4月23日(土)
—6月5日(日)



平櫛田中作「東方朔像」(個人蔵)



板谷波山作「彩磁椿文茶碗」(出光美術館蔵)

「老い」たる神

老いた人間は肉体的には確かに劣った存在です。しかし、蓄積された知識、経験は社会にとって大変貴重な財産です。「老い」たる者は優れた精神的存在であり、日常を超越した「神」とも見なされました。山姥・翁などの老いた姿の神を紹介します。

関連事業

記念講演会・パフォーマンス「老人介護とアートの力」

四月二三日(土) 午後一時三〇分、講師 折元立身氏

アーティスト折元立身氏は、パン人間などのパフォーマンスアートで国際的に知られています。近年は、年老いた母の介護をテーマに作品を発表しています。折元氏に制作の様子をお話ししていただき、展示室周辺でのパフォーマンスも行います。

記念講演会「神と翁」

四月二四日(日) 午後一時三〇分、講師 山折哲雄氏 司会 館長 赤坂憲雄

日本の神は古来、しばしば童子や老人の姿を借りて現れるものと信じられてきました。「老い」について、「翁」をキーワードに、宗教学者山折哲雄氏に語っていただきます。

記念公演「古典芸能に見る老いの姿」会津能楽会・やなぎみわ(三)公演

五月一日(日) 午後一時三〇分、講師 会津能楽会・やなぎみわ氏

「能」は日本文化のエッセンスともいえる芸能です。演目には「老い」をテーマにした名作も少なくありません。会津地域の能楽愛好者で構成される会津能楽会と、CG、特殊メイクにより老後の姿を映像化する作品を制作しているやなぎ氏による公演です。

記念講演会「老いの力」

五月六日(金) 午後二時、講師 玄侑宗久氏

長寿に恵まれた人物には、僧侶と芸術家が多く、彼らには晩年に新たな境地を切り開いた人も少なくありません。芥川賞作家で現役の僧侶である玄侑氏に長寿と創造の関連を語っていただきます。

友の会主催 映画上映会 恩地日出夫監督作品「藤野行」

五月八日(日) 午前二〇時三〇分、午後一時三〇分、解説 館長 赤坂憲雄

「姥捨」をテーマにした名作映画を鑑賞。当館館長による解説があります。会員の優先入場を行います。一般の方も鑑賞できます。

企画展《老いをめぐる美とカタチ》は平成一七年四月三日(土)から六月五日(日)まで開催しています。
観覧料 一般・大学生六〇〇円(四八〇円) 高校生三五〇円(二八〇円) 小・中学生二〇〇円(一八〇円) ()は二〇名以上の団体の場合の料金です。



木喰作「賓頭盧尊者像」(新潟県・十王堂蔵)



高野文子作「田辺のつる」原画(作家蔵)



遠藤香村筆「百老図」(個人蔵)

平成一七年度

「木曜の広場」のご案内

午後一時半より講堂において

館長 赤坂 憲雄
 学芸課長 若林 繁
 学芸員 佐々木長生

赤坂憲雄館長と学芸員による対談形式で行われる「木曜の広場」は、平成一六年度は「会津学事始め 四季の生業と暮らし」全二回が行われました。赤坂館長と学芸員による対談に対し、聴講者から数多くの質問や資料・情報提供もあり、充実した内容となりました。第一回の「会津農書の世界」の聴講者から、新たな「会津農書」上巻の筆写本の提供を受け、「会津農書」の研究に大きな研究資料となりました。その他、内容に関する情報には、地域研究を進展するうえで、地域の生の伝承や絵画・古写真の提供など、地域学としての「会津学」の構築について、大きな一歩であったとみられます。

赤坂館長は、「東北学」という雑誌を編集・刊行するなど、東北学研究の中枢を任い、多数の著書や調査・研究報告書を刊行しています。赤坂館長によると、東北の中にもいくつもの東北があるという視点のもと、県立博物館が立地する「福島学」、福島中の「会津学」という地域研究から、「東北学」を構築するというものです。そして日本中の「東北」、アジア中の「東北」、世界の中心の「東北」という構想を、東北より発信するという研究方法です。木曜の広場は、まず東北中の「会津」「会津学」から始めています。

平成一六年度は、会津地方の生業を中心し、会津の自然と生業との関わりを、「会津農書」や近世の風土記・風俗帳の文献や絵画資料と、民具と呼ばれる生活用具などの資料を通して、会津地方の人々の暮らしの歴史、民俗を論じてきました。会津地方は、浜通り・中通り地方と比較してみると、積雪寒冷地でブナをはじめとする落葉

広葉樹林におおわれ、そこには会津独特の文化を育んできました。歴史的にも縄文時代から漆の利用など、会津



講演風景、赤坂館長（右）と佐々木学芸員

は、生業という物質文化から、会津の歴史・民俗を通観した内容となりました。

平成一七年度は、「会津学事始め」の第二弾として、「四季の祈りと暮らし」と題し、信仰を中心とした精神文化からみた会津の歴史・民俗をテーマに、下記の内容で予定しております。赤坂館長と学芸員といっしょに、「木曜の広場」に参加し、「会津学」を構築してみませんか。そして、「会津学」のもとに、「福島学」「東北学」と進展させ、会津から新たな「日本」研究を始めませんか。

- 「会津学事始め 四季の祈りと暮らし」
- 第一回 四月七日 「会津の山の神信仰」
 - 第二回 五月一九日 「勝常寺の仏たち」
 - 第三回 六月一六日 「会津の仏たち」
 - 第四回 七月二日 「七夕と盆行事」
 - 第五回 八月一八日 「磐梯山信仰と恵日寺」
 - 第六回 九月一五日 「飯豊山信仰と成人儀礼」
 - 第七回 一〇月二〇日 「会津高野山と祖霊観」
 - 第八回 十一月二七日 「境の神と真人形」
 - 第九回 十二月二五日 「会津農書」と農耕儀礼
 - 第一〇回 一月一九日 「会津の初市と市神祭り」
 - 第一一回 二月一六日 「鶴ヶ城周辺の稻荷信仰」
 - 第二一回 三月一六日 「馬と信仰」



資料を前にして聴講者に解説する赤坂館長と佐々木学芸員

いわき市勿来金冠塚古墳から 出土した古墳時代の冑

横須賀倫達 考古担当

いわき市勿来にある勿来金冠塚古墳は径三〇mを測る円形の古墳であり、六世紀の終わりから七世紀の初めに造られたと考えられている。昭和二〇年代に発掘調査が行われ、横穴式石室と呼ばれる石材を積んで造った埋葬施設の中から多くの副葬品が見つかっている。その中には金銅製の飾り金具や刀、冑や馬具など、当時としては貴重なものが含まれ、古墳は県の指定史跡として登録されている。副葬品の一部は現在福島県立博物館が所蔵しており、今回はその中でも冑に注目して考察してみたい。

この冑は原型を保っており、部品がバラバラとなっていた状態で出土した。部品そのものも腐朽が進み多くは壊れていたが、調査の結果次のような構成であることが分かった。まず冑の本体を構成する縦長台形状の鉄板が六枚、正面にくる断面三角形の長方形鉄板が一枚、頭頂部に置く楕円形の鉄板が一枚、それと額を覆う小さな庇が一点である(写真)。この他、鍔(冑に装着し頭の両側及び後頭部を守る防具)の部品である鉄製小札一〇〇枚

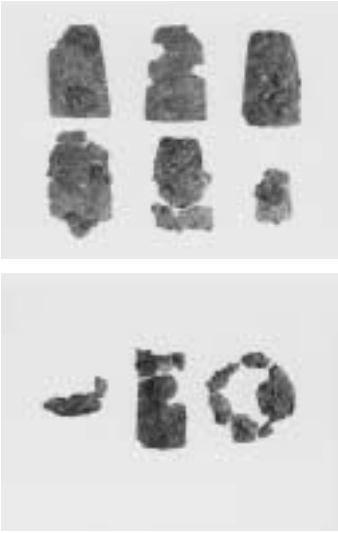


写真 冑の部材

以上、胸を守る防具と考えられる三日月形の鉄板が存在する。

最も驚いたのは、冑を組み上げるのに革紐が用いられていたことである。これまでの研究成果では、この時代の冑は部品どうしを鉄(リベット)で留めることが通有であり、半問上の名称で「堅矧広板鉄留式衝角付冑」と呼ばれる冑が広く流通していたと考えられていた。「堅矧広板」は縦長台形状の鉄板を、「衝角」は断面三角形の長方形鉄板を指し、鉄で留めた冑という意味である。調査の結果、金冠塚古墳の冑は「堅矧広板革綴式衝角付冑」と呼ぶことのできる冑であり、これまで日本での出土例が知られていない型式であった(復元図)。革紐で綴じる冑は金冠塚古墳が造られた時代より一〇〇年前頃に盛んに流通した型式であるが、三角形や横長方形の鉄板を使用するのが普通であった。また、同じ革紐でも綴じ方が全く異なる。つまり、全体の形や部品の構成は同時代の鉄留冑と同じなのだが、前世とも異なり後世にも繋がない革綴技法を採用しているのである。

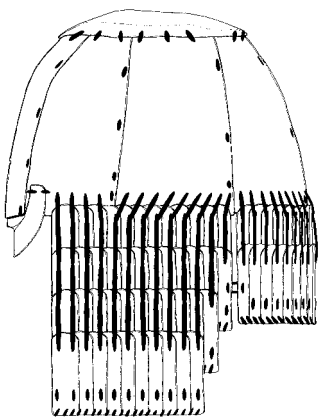
では、このような異型の冑がなぜ作られたのだろうか。実は近年、六世紀代の堅矧板を用いた革綴冑の例がみつかってきている。同じ福島県の郡山市淵ノ上一号墳、静岡県飯塚古墳、滋賀県宮山一号墳などから出土した冑がそれである。しかしこれらの冑は金冠塚古墳のものと同じではなく、またそれまで国内で作られていた「衝角付冑」とも異なる形に復元される。これらは、朝鮮半島で流通していた冑に類似し、彼地よりの搬入品である可能性が指摘されている。

この朝鮮半島系冑の存在から勿来金冠塚古墳の冑をみると、形状や部品の構成は国内産の「堅矧広板鉄留式衝角付冑」から、綴技法(細かく見ると部品の構成の一部も)は朝鮮半島系冑から取り入れたと考えられるのである。つまり国内製冑と朝鮮半島製冑の折衷品である。六世紀から七世紀にかけては、人的な移動も含めて朝鮮半島の文化の影響を多大に受けた時代と考えられている。

金冠塚古墳の冑もその影響の一端を受けて作られ、残念ながら後世には繋がない型式となってしまったものである。

では次に、なぜこのような珍しい冑や金銅製飾り金具(これも日本で唯一の品であり、何に用いられたのか分かっていない)などの貴重な品がいわき市にあるこの古墳に副葬されたのかを考えてみたい。径三〇mの円墳というのは大型の前方後円墳の造られた古墳時代にあつては、決して大きな古墳とはいえない。しかし、この古墳が造られた六世紀末から七世紀初めという時代は、全国的に前方後円墳が姿を消す時期と重なり、その後地方の有力豪族は円墳や方墳を造るようになる。金冠塚古墳も前方後円墳が消滅した後の円墳であり、勿来を中心とした地域の力のある豪族が造った古墳と考えられる。当時の有力豪族は先進的なモノを古墳に副葬することがステータスの一つであり、金冠塚古墳を造った豪族も貴重なこれらの品々を手に入れ、自分たちの権威を示したのであろう。

その後七世紀になり、日本は中央集権的な律令国家へと姿を変えていく。奈良時代と呼ばれる八世紀になると円墳や方墳も姿を消し、古墳文化は終焉を迎える。金冠塚古墳をはじめ、各地で盛んに古墳を造っていた豪族たちがどのように律令国家に取り込まれていったのか、今後の課題としたい。

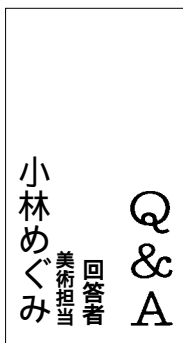


復元図 堅矧広板革綴式衝角付冑

Q：最近話題の「源義経」ですが、福島にも縁の場所や物があるのでしょうか。

A：福島も義経やその家来たちと縁の深い土地ですね。義経主従に関わる由来、伝説のある場所、資料がいくつもあります。福島市飯坂にある医王寺がまず挙げられます。医王寺は義経につき従った佐藤継信・忠信兄弟の菩提寺です。信夫庄司だった佐藤元治を父に持つ佐藤兄弟は、義経の庇護者であった奥州平泉の藤原秀衡の命により義経に仕えることとなりました。義経と共に各地を転戦し、継信は屋島で戦死、『平家物語』は、継信は義経をかばって矢を受けたと記しています。吉野から落ちのびる義経の身代わりとなった忠信の活躍は、歌舞伎の演目の一つ「義経千本桜」に取材され、馴染み深いものに

福島の義経伝説



君に仕ふ心はおなじ心なれば

いとど涙をとどめかねぬ

との和歌を二人に手向けました。この時定信は、医王寺所蔵の義経主従縁の品「義経のかぶと」「負櫓」「継信兄弟の鎌」などを目にしています。そのうち「継信兄弟の鎌」は、定信が中心となって編纂した文化財図録『集古十種』に掲載されました。鎌の中には、継信の命を奪ったと言われているものも含まれています。

実は当時定信の家臣が所蔵していた「継信の鞍」が、現在医王寺にあります。その由来書によると、継信の追善のために義経が屋島寺に納めたもので、以後「継信の鞍」として伝来しました。現在は木地だけの鞍ですが、この鞍も取り上げた『集古十種』によると、一九世紀の時点

Q&A

回答者
美術担当
小林めぐみ

なっています。忠信は京都で命を落としました。佐藤兄弟の石碑が建つ医王寺で源平の昔に思いを馳せた江戸時代の有名人が二人います。一人は『奥の細道』で名高い松尾芭蕉。元禄二年（一六八九）に江戸を出発した芭蕉は、東北地方を旅する途上、飯坂で医王寺周辺に足を延ばしています。ただし『奥の細道』を読む限り、芭蕉が涙で袖を濡らしたのは佐藤兄弟の忠義のためではなく、二人の妻が気丈に夫を戦場に送り出したその健気さのためであったようです。

もう一人は白河藩主だった松平定信。寛政二年（一八〇〇）に、定信は病氣療養のために温泉地飯坂に滞在しました。医王寺を訪れた定信は、継信・忠信兄弟の石碑の前で心中敬礼し、目を閉じて

では鞍の前と後ろに唐獅子の金属の飾りがついていたようです。医王寺では、その他にも義経主従との関わりを由来に持つ品を所蔵し、宝物殿で公開しています。

白河市には、息子二人を引き連れて鎌倉へと向かう義経を、佐藤元治が白河の関まで見送ったという伝説があります。その際に息子たちの武運を願って元治が地面にさした桜を「庄司戻しの桜」と言ったといい、現在は庄司戻しの桜の碑が建っています。

国見町には、奥州平泉に向かう義経が腰掛けたという「義経の腰掛松」が、原町市には「弁慶の腰掛松」があります。

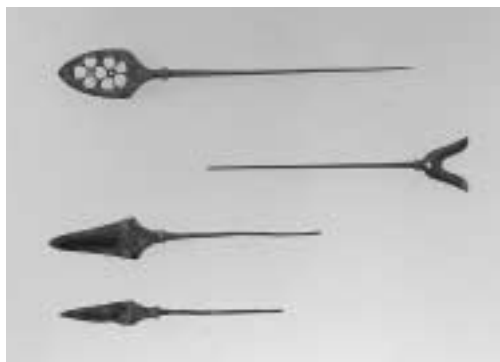
そして会津地方には、平泉に身を寄せた義経を慕って、はるばる京よりやってきた鬼一法眼の娘・皆鶴姫の伝説

があります。現在の河東町で疲労のため倒れた皆鶴姫は、己のやつれた姿を池の水面に見て絶望のあまり入水自殺してしまっただけという哀しい物語です。『集古十種』によると、会津藩家臣野村某家所蔵の「伝皆鶴姫所持の鏡」なるものがあつたようですが、残念ながらその所在は知りません。

このように県内に残る「義経伝説」。春風の心地よい季節に伝説の地をたどってみるのも楽しいかもしれません。



『集古十種』銅器一部分（館蔵）



鉄鎌（医王寺蔵）

トピックス

体験学習室「さわってたしかめよう」

コーナー新シリーズ

「縄文土器を感じてみよう」

四月から始まる新シリーズを紹介します。

当館の考古資料のコレクションに新地町三貫地貝塚の出土品があります。この貝塚は縄文時代後晩期の全国的に著名な遺跡で、県の史跡に指定されて、出土品の一部を展示室で公開しています。

今回はこの中の縄文土器に焦点をあて、土器を見て、触ることで縄文土器の持つ不思議な魅力を感じとってほしいと考え、三貫地貝塚の代表的な縄文土器一三点を復元製作しました。実物の縄文土器は完全な形で出土することは少なく、どこかしら補修が入ったり、劣化が進んで必ずしも使われていた当時の状態ではありません。また実物を型取りして樹脂を流し込むレプリカを制作しても手触りが全く異なったものになります。そこで実物をモデルに、粘土から成形することから始め、野焼きで焼成する縄文土器の技法で復元品を製作しました。

福島県を含む東日本の縄文時代後・晩期の土器は、深鉢形土器・浅鉢形土器の他、壺・注口土器・台付浅鉢など種類が豊富です。個々の土器は薄手に作られ器面の磨き込みが丁寧で、美しい光沢をもつものがあります。とくに晩期の土器は「亀ヶ岡式土器」という名で知られ優品が多く、縄文土器製作技術の粋を結集させたものと言えるでしょう。

この難易度の高い復元製作に挑戦していただいたのが千葉県在住の戸村正巳さんです。戸村さんは縄文土器の製作技術を研究している方で、精巧な縄文土器を焼き上げていただきました。是非この機会に縄文土器の魅力を感じてみてください。



三貫地貝塚出土品（左から深鉢形土器・台付浅鉢形土器・注口土器）

夏の収蔵資料品展予告

中世の恵日寺

会津仏教文化の再興

磐梯山の麓に位置する恵日寺は、平安時代初めに法相宗僧徳一が開いたと伝えられています。この寺にはいくつもの堂宇が立ち並び曼陀羅風の絵図が残されており、その裏書きには永正八（一五一一）年に高野山で修復されたことが記されています。中世には法相宗とは異なる系統に位置づけられた当時の恵日寺はどのような姿だったのでしょうか。

左の写真は、同寺に所蔵されていた室町時代の作品と考えられる「十二天図」のうちの毘沙門天像です。十二天図は真言宗の儀式に曼陀羅などとともに用いられる仏画で、この毘沙門天は北方の守護神として壁面に掛けられていたものだと思われる。表面の剥落は激しいものの、十二天像全てが伝わっており、現在は当館に所蔵されています。

古代とは様相を異にする再興された中世恵日寺の姿を、残された絵図や関連する資料を通して考えてみてはいかがでしょうか。



毘沙門天像
（十二天図のうち）



伝徳一廟塔

夏の収蔵資料品展《中世の恵日寺》は平成二十七年七月二十六日（土）から八月二日（日）まで常設展観覧料でご覧いただけます。

常設展示室「歴史・美術」テーマ展示

「ふくしまの美と歴史 祈り」
会期 四月一日(金)から 五月十五日(日)まで
「ふくしまの美と歴史 暮らし」
会期 五月十七日(火)から 六月十九日(日)まで

講演・講座

は要申込

企画展記念講演会・パフォーマンス
「老人介護とアートの力」
講師 アーティスト 折元立身さん
日時 四月十三日(土)午後一時半～三時
企画展記念講演会
「神と翁」
講師 国際日本文化研究センター所長 山折哲雄さん
司会 館長 赤坂憲雄
日時 四月十四日(日)午後一時半～三時
企画展記念公演
「古典芸能に見る老いの姿」
会津能楽会・やなぎみわJONJON公演
講師 会津能楽会のみなさん
日時 五月一日(日)午後一時半～三時
企画展記念講演会
「老いの力」
講師 福聚寺副住職 玄侑宗久さん
日時 五月六日(金)午後二時～三時半
博物館友の会主催 映画上映会
恩地日出夫監督作品「藤野行」
解説 館長 赤坂憲雄
日時 五月八日(日)
午前10時半～午後11時半
午後一時半～三時半
企画展展示解説会
「老い 老いをめぐる美とカタチ」
講師 学芸員 川延安直

日時 五月五日(日)午後一時半～二時半
六月五日(日)午後一時半～二時半
美術講座
「暮らしの中の美術 人の一生 長寿の祈り」
講師 学芸員 川延安直・小林めぐみ
日時 四月十九日(金・祝)
午後一時半～三時半
「暮らしの中の美術 人の一生 死への準備」
講師 学芸員 川延安直・小林めぐみ
日時 五月十三日(金)午後一時半～三時半
「暮らしの中の美術 人の一生 翁・唄」
講師 学芸員 川延安直・小林めぐみ
日時 五月二十七日(金)午後一時半～三時半
「にしん鉢を作るついで」(実技)
講師 会津大学短期大学部講師 宗像利浩さん
日時 六月十九日(日)午後一時半～三時半
「にしん鉢を作るついで」(実技)
講師 会津本郷町宗像窯にて 宗像利浩さん
日時 六月二十五日(土)午後一時半～三時半
民俗講座
「風絵を描くついで」(実技)
講師 技術伝承者 鈴木英夫さん
日時 五月三日(火・祝)午後一時半～三時
「小旗をつくるついで」(実技)
講師 伝統技術保持者 大野修司さん・大野広子さん
日時 五月五日(木・祝)午後一時半～三時
「民俗映像を見る1 わら人形を作る」柳津町青中地区の巨万遍(上映・解説会)
講師 学芸員 榎 陽介
日時 五月七日(土)午後一時半～三時
「民俗映像を見る2 カンゼンフシとフカグツケンペエ/只見の漁と館」(上映・解説会)
講師 学芸員 榎 陽介
日時 五月十四日(土)午後一時半～三時
「シリーズ会津の城を歩く1 猪苗代の歴史と自然」

講師 学芸員 高橋 充ほか
日時 五月二二日(土)午後一時半～三時半
「シリーズ会津の城を歩く2 猪苗代城の自然観察」(野外)
講師 学芸員 古川裕司
日時 五月二二日(日)午前10時～11時半
考古学講座
「古墳時代のカプト その構造と製作」(実技)
講師 学芸員 横須賀倫達
日時 五月二八日(土)午後一時半～三時

木曜の広場

講師 館長 赤坂 憲雄
学芸員 若林 繁
学芸員 佐々木長生
場所 講堂 入場無料

会津学事始め1四季の祈りと暮らし
第一回
「会津の山の神信仰」
日時 四月七日(木)午後一時半～三時
第二回
「勝常寺の仏たち」
日時 五月十九日(木)午後一時半～三時
第三回
「会津の仏たち」
日時 六月二六日(木)午後一時半～三時

実演

場所 体験学習室

「音語り」
語り部 山田登志美さん
日時 四月一七日(日)午後一時半～三時
六月二六日(日)午後一時半～三時
語り部 横山幸子さん
日時 五月四日(水)午前10時半～正午
六月五日(日)午前10時半～正午
「会津の唐人風つくり」
講師 技術伝承者 鈴木英夫さん
日時 五月三日(火・祝)午前10時半～正午
「機織り」

講師 染織工芸家 山根正平さん
日時 五月二二日(日)午後一時半～三時
「紙芝居」
講師 紙芝居作家 五十嵐邦子さん
日時 五月二十九日(日)午後一時半～三時
伝統技術実演
「須賀川の絵のほり製作」
講師 伝統技術保持者 大野修司さん・大野広子さん
日時 五月五日(木・祝)午前10時半～正午

やさしい展示解説会

*展示解説員による常設展の案内です。
*毎週土曜日、日曜日の午前10時半と午後二時から四五分程度行います。
*なお、他の行事と重なる場合は開催いたしません。

*その他、行事等の詳細につきましては、月行事予定表やホームページをご覧ください。

常設展無料開放日

五月五日(こどもの日)

四・六月の休館日

四月 四月(月)・二二日(月)・二八日(月)・二五(月)
五月 九日(月)・一六日(月)・二三(月)・三〇(月)
六月 六日(月)・一三日(月)・二〇(月)・二七(月)・二四(月)

*小・中学生、高校生は常設展を無料でご覧いただけます。